はぐくむ

自閉の
世界をひらく
母と子の
記録

森 正子著

ぶどう社

はぐくむ
自閉の世界をひらく母と子の記録

昭和五三年七月二十日　初版印刷
昭和五四年三月　五日　五刷発行

著　者　森　正子（もり　まさこ）
発行人　市毛研一郎＋田島純夫
発行所　ぶどう社
東京都文京区千駄木四―二―一四
電　話　〇三―八二八―三〇七四

印刷／安藤印刷　製本／東京美術紙工

序文　この想像的で、創造的な子育て

佐々木　正美（小児療育相談センター所長）

カズオ君は、決して軽症とはいえない自閉症児であった。

今日でもまだ時々、学校や社会のいろんな場面で、ちょっと緊張したりすると、状況とちぐはぐなことを言ったりやったりしてしまうことがあるというが、もう日常的には、家族の人や仲間たちとのコミュニケイションに、あまり支障を感じなくなった。学業成績も、本文を読まれればわかるとおり、まずまずのできである。

よくもここまで成長・発達したものだと思う。

森さん夫婦は、これまで決してカズオ君自身の治療を、いわゆる自閉症専門の治療者にゆだねることをしなかった。それがよかったと思う。

カズオ君の発達にとってだいじな方向づけをされる幼児期の頃は、わが国の自閉症の治療界は、以前に自閉症の成因は親の拒否的ないし攻撃的な養育態度にあるなどという誤った考えかたをされた時代の

後遺症を残していて、うっかりしたところに通うものなら、後々まで悔いを残すような条件づけや方向づけをされかねなかったからである。

重い精神遅滞の状態を脱しきれないでいる症児の場合はともかく、明らかに豊かな知的能力を潜在させながら、自宅や特定の治療施設以外の場には適応できなかったり、意欲がなくてどうしようもなく怠惰な生活を繰り返している年長自閉症児・者に数多く会ってみると、森さん夫妻が御自身で手塩にかけてこられてよかった、としみじみ思う。

勿論、森さん家族の周囲には、素晴らしい教育関係の人々や場が豊富に用意されていた。あるいは森さんがその存在に敏感に気づいたというべきかも知れない。

さくらんぼ保育園に通園できるところに居住していたことは、何にも増して好運であった。リハビリテイションとは何かということを、あらゆる障害児とその家族に、ほぼ完全な形で少なくともその初級（幼児期）のコースは教えてくれるところである。

斉藤公子園長が子どもを育てることにかける情熱はすごい。

すべての子どもが生きいき伸びのび、精いっぱい生活している。子どもたちはみんな、脳と全身が実に有機的に調和よく繋がっていて、豊かなボディ・イメージを発達させている。だから、音楽に合わせて跳びはねる時の全身による表現も、紙にマジックインクや絵具を用いて描く表現も、砂場での遊びも、みんなこの上なく想像的で、創造的にできる。

森さんはそんな保育園に、自ら見習い保母として勤めながら、カズオ君を通園させた。担任の深野静子さん（旧姓佐々木さん）も願ってもない保育者である。その後、私も何人もの障害児の保育をお願い

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

してきた。やがて、十分母子分離が可能になったのを見とどけるようにして、森さんは保育園を退く。

こんなふうに、園児を家族ぐるみ許容してくれる園である。それもあくまで厳しく、そして暖かく。以後の森さん夫妻のカズオ君の教育には、この厳しく、暖かくという精神が貫かれている。

保育園のいわば温室から、就学という荒海に出た時、いきなり出くわした「就学判定」という試練——視線が合い、10までの数の概念がありそうだから自閉症ではなく、したがって就学猶予が妥当であるという、森さんにしてみれば何がなんだかわからない判定が出される。

この無責任な教育界に対する森さん夫妻の憤りは強い。夫妻ご自身が教師であるから、自分たちが所属する世界のこの頼りなさには、ひどい悲しみを禁じ得なかったことだろう。自閉症児親の会の仲間の須田初枝さんたちの声援を背に、カズオ君の就学権を得るための努力は、まさに親でなければの迫力がある。そしてカズオ君は普通学級に入学したのである。

カズオ君は学校でも先生に恵まれた。私は担任の先生には一度お会いしたことがあるだけだが、森さんとの交換ノートに見られる文章には、先生のカズオ君に寄せる教育者としての愛情と熱意がピンピン読みとれる。担任教師ばかりではなく、学校全体で応援してくれもした。

しかし、自閉症児を普通学級で教育するために、親が家庭や学校でどんなに努力しなければならないか、本文を読むとよくわかる。

数の概念や計算を教えるにしても、ひとつのストーリーをもった話の理解を可能にするためにも、森さんはタイルブロックを用いて苦労したり、娘さんたちを動員して手造りの紙芝居をつくってミュージカルをやったり、それはもう筆舌に尽し難い根気のよい努力を何年も続けて来たのである。

今日、自閉症児の治療や教育は、こういう森さんたちの試みや実践の結果から多くを学んで修正されつつある。

森さんはカズオ君を特殊な治療や教育や生活の環境に決しておかなかった。いつもごく普通の子どもたちの生活の場にカズオ君を置いて、生活のために必要なことを、いろんな工夫をこらして熱心に根気よく、時には非常に厳しく教えて来た。いわばリハビリテイションの場にいつも親子でいて、リハビリテイションへの努力を続けて来たといえる。

そしてもう一歩のところまでさしかかった。登山でいえば七合目くらいのところであろうか。後に続く人たち、とくに自閉症児とその家族の人たちに、大きな励みになると思う。

それにしても森さんは、今日の今日まで周囲の人に恵まれている。埼玉大学の清水寛さんや西村章次さんたちの平素の学問的精神的支えや、高茶屋病院の十亀史郎さんたちのちょっとした助言の意義なども、森さん夫妻は忠実に根気よく実行する人であるだけに、その意義は大きい。

多くの有能な協力者や助言者を得て、森さんは自閉症児の親として、ひとつのありかたを示してくれた。

（ささき　まさみ）

はぐくむ——自閉の世界をひらく母と子の記録——・目次

序文　この想像的で、創造的な子育て……佐々木　正美　一

第一章　カズオからの出発

1誕　生……一〇
2異常のあらわれ……三〇
3親としてのとりくみ……四五
4一歳前の異常と早期発見……六五

第二章　子どもたちのうずの中へ

1さくらんぼ保育園へ……七八
2一年目―母も、子も……九一
3二年目―母子分離……一二六
4三年目―巣立ちへ……一三八
5卒園式……一五一
6対人関係と集団……一五六

第三章　育ち合いを願って

1 教育の場をもとめて……一七〇
2 小学校へ……一八二
3 一学期―教科学習へのとりくみ……二〇一
4 夏休みの日記……二三一
5 二学期―忍者の世界から引っぱり出せ……二三五
6 家庭＝学校＝地域……二五〇

附　章　自閉といわれる子どもの言葉と発達

1 認識のひろがりと言葉との関係……二七四
2 アンケートにみる言葉の姿……二九四
3 私たちの「ゆさぶり療法」……三〇八
あとがき……三三一

カバー写真・提供「主婦の友」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

第一章
カズオからの出発

瑞栄誕生の頃（佐保，私，カズオ，志保）

1 誕生

一九六八年七月三十一日、午前四時、カズオは正常分娩で生まれた（体重三四四五g、身長五〇・五cm、胸囲三〇cm、頭囲三一cm）。

その年の夏は異常に暑く感じられ、私は妊娠八か月目頃から、かなり身動きするのが辛かったのを覚えている。もともと六十キロを下ったことのない肥満体のわりには、健康で動くことを何とも思わない身体だったが、妙に身体を動かすのがおっくうになっていた。月に一度の健診では、母体も胎児の発育もすべて良好で、これといって心配することはなかった。

しかし、四児を出産した後で比べてみると、他の女の児たちの場合は出産まぎわまで、お腹の部分だけがいつもと違ったスタイル、といった感じで、家事も何もかもやって一向に辛さを感じなかった。それなのに、横にこそならなかったが、カズオの時はやはり辛かったと今でも思う。

二人目ということで安心したためか、主人が郷里の奈良へ帰っている間に、予定日より二十日も早いのに破水があって、慌てて夜半、タクシーで病院に駆けつけた。

宿直の看護婦さんが「三指ですからすぐ用意して」と、あくびを噛み殺しながら、分娩控え室の固い

ベッドに案内してくれた。長女の時は四十八時間もかかったのに、カズオはわずか四時間で、とうとう控え室に置かれたまま当直医が一度も姿を現わさないうちに誕生した。

そのあとの二女、三女の時も分娩室へ入ってから二十四時間はかかるような分娩だったのに、彼一人がわずか四時間でこの世に誕生したことにすら、私の責任ではないと思うものの、彼の障害を思う時、後ろめたい思いをぬぐいきれない。ものの本によると、陣痛の大切さ、産道に一定時間いることの必要性が説かれていて、正常分娩であったことだけに安堵しているわけにはいかないとあるからだ。

しかし、分娩直後に飛び込んできた看護婦さんたちに適当な処置を受け、元気な産声を聞きながら「男の子ですよ」と告げられた時の嬉しさはこの上ないものだった。

頭囲が少し大きめだったためか、額に二、三ミリのすり傷のような筋が数本あったのが気になったが、看護婦さんはよくあることで一週間もたてば消えますと言っていた。事実、病院から退院する頃にはそれは消えてなくなっていた。

仏像の目をした子

主人と一緒に見舞いにきて、一週間ほど滞在していた義母（はは）と私はこんな会話をした。

「お義母（かあ）さん。興福寺の宝物殿にある、聖徳太子の三歳児像という仏像をご覧になったことありますか」

「さあ、どやったかいな」

「私、あの仏さんが大好きで、学生の頃から栞（しおり）にしてある写真を読む本の中に入れて持ち歩いていた

くらいでしたの。あの仏さんの目と、この子の目、とても似ているような気がします」
「聖徳太子様と？」
「ええ。そうだわ、名前、〝聖太〟としたらどうかしら」
「そんな、大それたこと。もったいない」
仏心の厚い義母は、私の暴言が、遠く奈良の興福寺にまつられている太子像まで届くことを恐れるかのように手をうち振って、合掌しつつ口の中で私のかわりに謝ってくれたのだった。
その像はたしか一メートルにも満たない小さなもので、顎のくびれた丸い童顔に、上瞼の線がキリリと長くて、目の鋭さと対照的に、合掌した両手の甲のふくらみに幼さがあった。宝物殿の名の知れたさまざまの仏像の中では隅の方のあまり目立たない場所にそっと安置されている像を、私は学生時代にわざわざ見に行ったほどだった。
私の産んだ男の子は、新生児の間そんな目をしていた、と今でも思う。こんなことを言うと、今は亡き義母は「これ、これ」と天上界で私をたしなめるだろうし、下界の人たちには「何という思い上り」とそしられるかも知れない。一度に十人もの人の話を聞くことができたという伝説の超人物と、九歳になっても、一人の人の話すら十分に聞きとれない自閉といわれるわが子との対比なのだから。
しかし、ごく稀にだが、いまでもカズオにふいとあの時のあの仏像の目を感じて、胸を衝かれることがある。そんな時は必ず、私たち家族の言葉で言えば、彼は忍者の世界に閉じこもっている時なのだ。
その目は、キリリとして遙か遠くの何ものかを見据えているように澄んでいて、ふと声をかけようとして声を呑んでしまうことがある。そんな時、古事記の蛭子の伝説を思い、古代の人が未熟児に神を見

た感覚が私の中に蘇ってくる。

だが、私の子は神でも仏像でもない。ひとりの人間としてこの世に誕生したのだ。仏師が、人間という実像を通して太子の虚像を描き、人間から人間らしさを捨象し、仏師の追い求める像をノミで刻んでいくのとは逆に、私はカズオの目を、人間の世界へ、人間のあらゆる醜さも含めて、引き戻さなければならない。美も醜も愛も憎も渦巻く人間の社会へ、たとえその中で生きることが彼にとってどれほど厳しく辛いものであるとしても。

小学校の一年生になって、彼が初めて学校で覚えてきた言葉は、

「キチゲエ」

だった。彼は澄んだ瞳で、新しい言葉を使う誇らしさをこめて何度も何度も私に向かって「キチゲエ」をくり返した。私はたじろいだ。初めは「気狂い」という言葉の持つ非情さに。次には自分に向かって。私は、彼に自分を気狂いと認めさせんがために、あれほどに努力して彼を学校という社会へ送り込んだのかと。

その頃、私には彼の前で涙を流すことは許されなかった。彼は言葉を駆使できないがゆえに、言葉以上に私の心の揺れにはひどく敏感であったし、少なくともそれまで、新しい言葉を覚えた事実に対して賞讃を惜しむようなことは一度もしていなかったのだから。

冷静に考えれば、私が彼を人間らしく育てようとすることに、嘆きや苦しみを抱くことの方がおかしいはずなのだ。頭の中では、人間であることの素晴らしさを信じられないで一生を送ること以上に不幸

なことはないはずだ、とはわかっている。彼が人間を恐れて忍者の世界にひきこもってしまう時、その忍者の隠れ里より素晴らしく魅力に溢れた人間の世界を用意してやることの方が急務ではないか、という理屈もわかっている。

仏師が削り落とした人間らしさを、私たちはカズオにひとつひとつとり戻そう、キリリとした仏像の目を、キビキビとあちこちに興味を移していくあの子どもらしいドングリまなこにしていこう、と心に決めるまでにも、情にひきずられ、彼をかき抱きたくなる自分との闘いに、まずうち克たなければならないのだった。

世話のやけない男の子

息子は「聖太」でなく「一生」と命名された。彼の誕生後すぐに、私たちは生活全般を私の育った家である、埼玉県北の地方都市の郊外に移した。農家造りの古ぼけた鴨居には半紙に墨で書かれた彼の名前がしばらく貼られることになった。

都内までの長距離通勤を苦にしていた主人も、長男誕生にいささか気をよくして、せっせと帰宅も早かった。一男一女の母として、私にはかりそめの穏やかな日々が続いた。夫を送り出した後、掃除、洗濯、育児。時には長女志保の時に読んだ育児書を読み返したり、少しこまめに動きまわる長女が編目を狂わせるのを気にしながら、編物機を据えつけて子どもたちのセーターなどを編んだりした。

た産院で受けた一か月健診では、体重五三四〇g（一三三%）で、発育順調と言われた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c